

アジアに門戸を開放せよ —中国人が見た日本



嚴浩 (Yan Hao)

1962年、中国江蘇省出身。79年天津大学入学、81年中国教育部(文部省)派遣留学生として、コンピュータ科学を学ぶために山梨大学に留学。同大卒業後、東京大学大学院で医学統計を専攻し、臨床試験に関わる研究・実務に従事する。91年に臨床試験受託のイーピーエス株式会社を設立、代表取締役社長、現在に至る。2001年、ジャスダックに株式上場。



劉迪 (Liu Di)

1959年中国ハルビン市生まれ。黒龍江大学文学学士中国社会科学院大学院文学修士課程、早稲田大学大学院法学博士課程修了、法学博士号取得。1988年人民日報国際部編集者・記者、1991年早稲田大学外国人研究員、香港「大公報」駐日本特約記者、1992年慶応大学文学部訪問講師。2000年早稲田大学現代中国文化研究所研究員。2003年より現職。著書に「現代西方新聞法制」がある。



周牧之 (Zhou Muzhi)

1963年中国湖南省長沙市生まれ。中国湖南大学工学学士、東京経済大学大学院経済学研究科博士課程修了、経済学博士号取得。85年中華人民共和國機械工業部(省)入省、91~94年(財)日本開発構想研究所研究員、95~2002年(財)国際開発センター研究員、主任研究員を経て2002年より現職。主な著書に「メカトロニクス革命と新国際分業—現代世界経済におけるアジア工業化」、「都市化:中国近代化の主旋律」等。

嚴浩

イーピーエス株式会社
代表取締役社長

劉迪

早稲田大学国際地域経済研究所
客員講師

周牧之

東京経済大学経済学部助教授

日本経済の長期にわたる停滞とは対照的に、中国の台頭が著しい。中国から留学生として日本に来て、その後も日本で活躍している嚴浩、周牧之、日本に留学中の劉迪の3氏に、日中関係の変化や日本が進むべき道について議論してもらった。3氏は、中国をはじめアジア諸国の経済発展でかつての日本の輝きは失われたものの、アジアとの関係を深めることで活力を取り戻すことは可能だと指摘する。

工藤 日本は今後、アジアの中でどのように生きていくべきかなどで、私たちはこれまで議論してきました。その背景には、経済的な苦境が長引く中で、中国の台頭を軸にしたアジアの変化から取り残されかねないという認識もあります。こうした日本の状況を中国から日本に来られて、日本で活躍されている皆さんと議論をしていきたいと思っています。それではまず自己紹介を兼ねて、いつ頃日本に来て、今、どんな形で活動されているのかを話していただけますか。嚴さんからお願いします。

嚴 僕は、1981年に来ました。76年に毛沢東が亡くなって、77年から大学入試制度が

復活した。多くの日本人は、文化大革命は知っていますが、こういうことは案外知らない。10年間は大学入試はストップしていました。中学校までは文革の時期で、われわれの世代は、大学に行こうなどという考えはまずなく、普通はどこかの工場に行くしかなかった。鄧小平が出てきて、大学入試が実際に復活したのが正式には1978年、昭和53年です。鄧小平は78年に訪日し、そのときの有名な話として、新幹線に乗って、自分はむち打たれているようだ。新幹線のスピードに、中国と日本との間にいかに大きな差があるのかを実感したわけです。そういうこともあって、留学生制度ができ

たんです。

第1期は、中国で78年に大学に入学して、派遣されたのは80年。私の場合は、79年に中国で天津大学に入って、半年勉強して、80年に1年間、日本語と、日本の高校の教科書のおさらいをして、81年に来ました。海外に派遣されていた学部留学生は日本とイギリス、フランス、西ドイツの4カ国に100人ずつでした。アメリカには学部生は派遣していませんよ。当時の認識では、アメリカの学部教育のレベルは高くないと。

留学先の日本で会社を設立

工藤 当時は日本を評価していたわけですね。

巖 当然そうです。しかし、日本に來ると、アメリカは評価されていて日本は評価されていないと思込んでいる人が多い。僕自身は、何も知らないで日本へ來た。100人で來て、大学も九州から北海道まで割振られた。それも來る直前に、君はどこへ行けと言われて、僕はもう1人と一緒にコンピュータを勉強してこいということで、最初は山梨大学の計算機科学科に行つたんです。來るときには、服装費などが出ました。

工藤 服装費って何ですか。

巖 当時はみんな人民服だから、洋服を買うわけです。当時の日本と中国は、当然、体制の違いから、例えば歌だとか映画だとか、完全に違つた世界ですよ。今の中国の若者と日本の若者は、ある意味で同時代を

生きているんですよ。

僕は18歳で、日本の大学へ行って、コンピュータを勉強してこいと言われていたのだけれども、興味がだんだんコンピュータから統計のほうに移つて、途中で統計を始めました。大学院も統計の関連で東大の医学統計というところに行つて、医学データの解析などをやっていた。80年代の後半で、製薬企業も臨床研究機関も、抗がん剤の治療効果の評価などには統計を使わなければいけないということが認識され始めてきたときです。

大学で勉強をしながら、そういう仕事をやっていた。そのうちに忙しくなつて、製薬企業と契約をしたりするのに窓口も必要だから、91年に今の会社をつくつたんです。つくつてみたら結構ニーズもあつて、こっちのほうに専門になつて今日に至っています。もう22年ですよ。日本のほうが長いです。

工藤 その間、日本に対する評価はどうなりましたか。

巖 その前に、僕の場合、学部生から派遣されてきたんですが、今は大学院から、学部派遣はない。僕らのコースで來た人の特徴は、18歳という若さで來ていること。もう1つは、日本全国に行かされ、ある意味で田舎での生活経験がある。また、81年当時の中国留学生は、訪問学者を含めて日本全国で800人しかいなかった。周りに中国人はいないわけですから、日本社会に溶け込みやすいグループだったと、そのように認識しています。

日本に対する評価ですが、学生のときはそんなに経済に興味があるわけでもなく、

80年代は日本は景気がよくてバブルの時代だと言われるけど、僕ら学生にとってはそんなに感じたことはない。ただ、20年間で、中国と日本の間の経済レベルと、さっき言ったように、歌とか映画とか、その辺の差はどんどん縮まってきていることは痛感するわけですね。

中国人の勤勉さは日本人に劣らず

工藤 なぜ日本に来られたのですか。

劉 私は大学で日本語を勉強していたんです。82年に卒業して、社会科学院に入り、日本研究を始めた。大学院でも社会学で日本社会の研究を専攻していた。卒業して、人民日報社の国際部に入りました。日本の研究の関係で、国際部のアジア報道の部署に配属されました。私は91年に日本に来たのですが、それまでは中国の新聞社に勤めて、アジアの報道を担当していました。来日する前、私は日本をはじめアジアをこの目で見て、取材しながら、アジアの真実を中国に伝えようと考えていました。そのとき、天安門事件があって、多くの若者は進むべき方向を見失って、混迷に陥っていた。私はもう1度勉強をし直して、何か新しいものを身につけようと考え、会社をやめてこちらへ来ることを決意しました。

来日後、香港の大公報新聞の友達が、日本特派員がいらないからぜひやってくれと言うので、すぐに引き受けて、それ以来ずっと、勉強をしながら記事を送っています。これらの記事の中で、日本経済の成長と停滞について多く書きました。私が大学や大

学院の時代に勉強した日本の経済成長の理由にはいろいろな説があって、近代化論とか、日本人の勤勉さについていろいろ教わったのですが、中国人の勤勉さは日本人に劣ってはいない。アメリカの学者が唱えたような理由であったとは思わなくなりました。

工藤 この10年とか15年の間に、日本は停滞し、混乱している状況にある。最近是中国人の留学生も、日本よりもアメリカへ行くという現象があると聞きます。つまり日本に対する関心が、昔とは変わって……。

中国近代化の原点は日清戦争

周 イメージが違ってきたんです。

私は湖南大学で4年間の大学生活を送りました。湖南大学のキャンパスに黄興（こうこう）や蔡鍔（さいがく）など中国の近代史を飾る英雄の墓があった。おもしろいことに、彼らのほとんどは日本への留学生だったんです。日清戦争で中国が負けた後、20世紀初頭に中国のエリートが大勢日本に来たわけです。国費留学生もいたし、私費もいた。

中国はアヘン戦争から日清戦争までの数十年間、洋務運動という近代化のプロセスを一生懸命やってきた。日本では中国の洋務運動に少し遅れて明治維新があった。ただし洋務運動と明治維新という2つの近代化プロセスの性格は根本的に違っていった。日本は工業社会あるいは国民国家というコンセプトの下で新しい社会を形成しようとした。

中国はそうではなかった。外からアヘン戦争のような戦争を仕掛けられてきた。それに対抗するために近代的な軍備をしなければならない。軍備をするために近代的な工業が必要だった。しかし社会を変えるつもりはないし、社会を維持するイデオロギーを変えるつもりもなかった。洋務運動はむしろ、それを維持するための体力をつくらうという近代化プロセスでした。

それで数十年間やって、ある程度の成果も上げた。しかし、日清戦争で敗北したわけです。しかも、隣の小さな島国という位置づけだった日本がいきなり現れてきて、洋務運動のシンボルである中国の大艦隊、北洋艦隊がやられ、最精鋭の陸軍部隊もやられた。1840年に起きたアヘン戦争よりも、60年後に起きた日清戦争のほうが、衝撃はずっと大きかったんですね。

それで中国の有志の人たちは日本へなだれ込んできた。日本へ来て、問題意識を持って中国に帰って行って、清王朝を倒し、新しい国づくり、社会づくりに奮闘したわけです。だから、中国の近代化プロセスのひとつの原点は日清戦争であり、近代化のひとつのモデルは明治維新でした。

時は飛んで改革・開放の直前に、華国鋒の時代があって、その時代から大きなプロジェクトをやらう、新しい近代化プロセスに入ろうという政策を採りました。たくさんのミッションを海外に出したんです。そのときに、ある中国の冶金部の高官が日本に来て、新日鉄の工場ボタン1つで鉄がドカンとできるのを見てショックを受けた。我が国もボタン1つで鉄をつくる工場

をつくりましょうということで、上海宝山製鉄所の構想ができたわけです。中国は日本に技術、プラントの協力を要請して、大きなプロジェクトがスタートした。

宝山製鉄所は中国の建国以来最大のプロジェクトだったんです。胡耀邦さんとか趙紫陽さんが直轄でやっていた。胡耀邦さんは日本の近代史に非常に魅力を感じていた人です。彼が最も愛読した本に、吉田茂が書いた、日本語のタイトルは忘れましたが、中国語訳で『激動の百年史』という本があります。

中国への技術移転を拒んだ日本

工藤 それは何年ぐらいですか。

周 80年代の前半です。僕は大学を卒業して、機械工業部に配属されて、たまたま宝山製鉄所の担当だったんです。最初はどういうムードだったかということ、日本と契約できるものは全部契約しろというわけですよ。

工藤 それがどうなったんですか。

周 しかしその後、中国ではそれが逆転してしまっただけです。要するに技術移転の話なんです。宝山製鉄所も2期目になると、国内の政治圧力がすごく強くなって、技術を導入しろと言われるようになりました。そこで日本側に対して、技術を買うから移転してくれと言った。それに対して交渉の中で日本側はプラントは売るけれども、技術移転はしないという話が多かった。そうすると、ドイツとかアメリカが、おれたちにやらせてくれと言ってきたんです。

工藤 それは何年ぐらいですか。

周 これは85年から。今振り返ると、日本の企業は物を売る発想から転換できなかったんですよ。技術を売ろうとしなかったんですよ。

工藤 その後、中国は日本と疎遠になり、無視するという感じになっていったのですか。

周 宝山の2期のときは、海外とのプラント契約の3分の1以上をドイツがとってしまった。3期はおそらく半分以上はドイツとやったと思います。ドイツは、交渉する段階でチャーター機で資料とエンジニアを何機分も運んでくる。ドイツ人技術者が中国のプラント製造工場へ来て、「こういうところは直さなければいけない」という意見書をどんどん出した。これは本気で技術移転してくれると中国側に実感させたわけです。ある大きなプロジェクトでは日本と契約済みだったんですが、われわれはそれを破って、賠償金を払ってドイツと契約するくらいのことをやった。

宝山もそうだったのですが、もう1つは自動車です。隣の局が自動車局だった。ある日、食堂の雰囲気違って、ワサワサしている。何を怒っているんだと聞くと、ミッションが日本から帰ってきて、「なめられたんだ」と憤慨していた。日本のある自動車メーカーだったんです。この会社は今もうその当時の1件についての自覚はないかもしれませんが。あとき自動車局が自動車をつくりたいということで協力の要請に行ったら、この会社のトップは、「あなたたちにつくる能力はない、つくる必要もない」と言った。当時、この会社の車は中国でバンバン売っていたんですよ。現地

でつくる発想はなかったと思います。

工藤 日本へ来ようと思ったのは、その後ですね。

周 時代が変わったというのはそこなんです。ようやくではなくて、この会社はこの10年必死でした。中国の関係部署はずっとこのメーカーを入れようとしなかったんですよ。当時の怨念は大きなコストとなりましたね。

僕が日本へ来た理由は、日本の通産政策に対する世界的な神話があったからです。

自信過剰から自信喪失の国へ

工藤 「日本は通産省と企業が一緒になってやるからアメリカに勝つ」という話がありましたよね。

周 それを勉強しに来たわけですよ。しかし、来たときは88年、ちょうどバブルの真っ最中でしたが、この十数年間で日本は自信過剰の国から自信喪失の国になってしまった。僕は一番自信過剰だったのはエコノミストだと思う。ある有名なエコノミストは、もうアメリカから学ぶことは何もない、教えることしかないと言い張った。その本人が数年後に、やはりアメリカから学ばなければいけないということを言うんですね。その人がいまだにメディアに登場してくること自体、メディアの退廃ではないかと私は思いますね。

工藤 その過程を見てきているわけですね。今、中国が躍進し始め、海外からどんどん人、物を入れて、まだいろいろ矛盾はあると思いますが、中国の大きな変化がア

ジアのパラダイム転換を促したことは事実です。その中で日本が自滅し始めていると。日本は孤立し始めているという印象があるのですが、皆さんはどのようにごらんになっているのでしょうか。

巖 72年が日中国交回復でしょう。あの当時、アジアでは、いわゆる資本主義に成功している国は日本しかなかった。中国にとって政治的に一番問題がなくて付き合いやすい国は日本だったんですよ。アメリカとはまだいろいろ問題があった。隣に日本という国があって、すごく進んでいて、今のように経済摩擦だとか、歴史問題だとか、そう顕在化していなかった時代ですね。中国側の指導者も、鄧小平にしても、日本に対する皮膚感覚はあるんですよ。

工藤 皮膚感覚とは親しみということですか。

巖 少なくとも実際に付き合い合ったことはあるということですね。周恩来なども留学していたし。相手と戦闘をしたことがあるということは、「ああ、何とか將軍はこうだった」というような感覚はあるわけでしょう。国際政治的にも、日本が一番近い、世代的にもそうでしょう。お互いに筆で書くと、「おお、分かるね」と。「では学ばなければ」と思うのは当然だと思うんですよ。僕らの世代、45歳ぐらいまでの世代の日本に対する原体験的なイメージは、今の20代と違う。

自分たちはアジアの中で 特殊な民族という日本人の思い込み

工藤 今の20代はアメリカが……。

巖 あえて言いますと、何かと言うとアメリカと比べたがるのは、日本人も若干意識過剰だと思う。それはさておき、周先生もおっしゃったように、その後、中国にとって選択肢は増えたんですね。ドイツもありイギリスもありフランスもあり、もっと重要なアメリカとの経済関係もどんどん深まった。そういう中で、今トヨタの話が出ましたが、日本の企業などはやや戦略に欠けた。時としては見下したような、日中友好と言う場合、日本人が余裕を持って上からものを見てきたわけですよ。(笑)

日本人は「アジアの中で、うちだけは特殊な民族ではないか」という、優越感と言うよりは一種の思い込みがあって、過去の成功体験から、隣国にはできないことをわれわれはやっている、比べられるのは欧米だけだよと、こういう感覚が濃厚にあった。しかし、90年代に入って、その思い込みが揺らぎ始めた。これはこれからの日本を考えていく上で決して悪いことではないんですよ。

私の解釈では、そういう思い込みは明治維新の影の部分だと。日本も不幸だったのは、日本だけが成功してしまった。しかし、今は中国に限らず、やればできるということはみんな分かるわけです。日本は唯一、品質が良かったと言っても、やってみると、半導体なども結構みんなつくれてしまった。そうすると、100年以上の間に培われてきた、引きずってきた一種の感覚を早く変えていかないといけない。

周 一部の日本人は欧米人に対してコンプレックスが、アジア人に対して優位感が

あって、その中で自分がぶれていることは、いろいろな場面で実感している。中国の文化の中では、本来、人間はぶれてはいけない。上司と付き合うときも、部下と付き合うときも同じ感情、フェイスであれど。そうでない人は尊敬できないんです。

蔽 どの国にもあるとは思いますが、日本では顕著なんですよ。ランキングが大好きですね。国内でも、あの会社は1位、あの会社は2位とランキング付けして、いつの間にかその1位の会社にいる人間まで1位みたいになってしまいます。大学とかも全部そう。

小悪を大義にしたら進歩の原動力なくす

工藤 今はちょっと崩れましたけどね。

周 これはなかなか、まだまだですよ。

蔽 そういうランキングを国にまで適用するのが好きなんです。

周 このランキングのどこに問題があるかということ、社会に活力をもたらすことができない。東大に入ったやつは自負して、自慢して、それで活力を失う可能性がある。入っていないやつも意気消沈なんです。

工藤 中国にはそれはないんですか。

周 ないです。

蔽 ないと言うより、日本は顕著なんです。

周 なぜ田中角栄がやられたかということ、彼がやられたことによって日本の活力は失われてしまった。大学卒でもなくバックラウンドもない人がのし上がってきたということで、日本のジャーナリズムがそれを叩こうとしたんです。なぜ田中角栄に焦点を

絞ってやったのか。焦点を絞ってやった結果はどうかというと、その後の不祥事事件を見ると、全部新規参入して台頭してきた人がやられるようになったわけですよ。むしろこういう人たちはヒーローと言っている。大義はヒーロー、ヒーローの小悪は小悪で整理すればいい。小悪を大義にしてしまったら社会の進歩の原動力がなくなる。社会の進歩にとっての大義は、新興勢力をどんどん生み出すことですよ。

蔽 言い方を変えれば、日本は成り上がり者は嫌いなんですよ。もっと本質的に言えば、その成り上がりが本当に力をつけて成り切ってしまうと、今度はその秩序は崩れる。それは場合によっては国対国の関係、日本と海外の関係でさえそう思えるときがあるんですね。水平関係を結べない、対等関係を結べない。日本人は本当に負けたと考えたときは、結構ぺこぺこする。まだ相手のほうが下だと思えるときは、ちょっと見下す。

輝きを失った日本モデル

周 これは大事な話で、武士の志と関連があるかどうかは分かりませんが、切るか切られるかということで、僕から見ると、切られたときはあまり文句を言わないのが日本人なんですね。だから、アメリカに占領されたときも、GHQ（連合軍総司令部）の政策に反対するとか、鉄砲を撃ちまくるようなやつはいない。中国だったらそういうやつはいっぱい出るわけですよ。

中国の近代化の歴史は、私は「へそ曲が

りの歴史」と言っているのですが、なかなか素直にならない。一時期、日本モデルは非常に輝いて見えた。アメリカモデルと違う、アジアモデルだから、勉強する価値があると。最近はややく素直にアメリカがいいというふうになってきて、僕は逆にこれは危険かもしれないと思っている（笑）。

工藤 一時期は日本モデルも輝いて見えたけど、今はアメリカモデルのほうが良いと思いはじめたということですか。

周 そうではなくて、日本モデルがばれたのです。日本のことを勉強してみると、日本では「アメリカに追随すればいい、追随したからこそよかったじゃないか」という言論が意外に多い。こうした日本発の言論が海外にばれてしまったから、日本モデルの輝きはなくなってしまった。

工藤 日本を相手にしなくても、直接アメリカとやれば良いではないかと。

周 留学生も直接アメリカへ行ってしまう。だから、僕たちは間違えて日本に落ちたんじゃないかなどと言われてしまうんですよ。

工藤 皆さんは間違っって日本に来た、アメリカへ行ったほうがよいのではないかと。

周僕はそうは思わない。ただし、人から言われるんです（笑）。

過去の栄光へのこだわりを捨てよ

劉 私が中国にいたときの日本のイメージは、ここ十数年でかなり変わりました。日本が外に見せた部分と内実は違っていたと。あるいは、最初は日本の生産性は高いとい

うイメージがありましたが、それは日本のごく一部の企業であって、本当に国際競争力のある企業は13%しかないと。そういう競争力のある企業が外国に製品を出し、外国に進出し、あるいは日本の商社ビジネスマンが世界を走り回る。それが世界で日本と思われていた。日本へ来たら、路地裏の工場やサービス業、行政でもかなり非効率なやり方をしているのを見て……。

工藤 そういう非効率的なところが中国へも動いている。

周 いや、動いているのは効率的なところですよ。モビリティが高い人間や企業はみんな有能なんです。そこが問題なんですよ。

巖 中国で、アメリカモデルが良いのではないかと、あるいは80年代前半には日本モデルが良いのではないかと、こういう話は常にあると思いますよ。ただし、これから中国がアメリカモデルに行くとは、個人的には余り思えない。何モデルでもないんですよ。結局、中国は何モデルかを適用するには広過ぎるし複雑過ぎて、発展の格差も大きい。上海では、あるいはホワイトカラーの企業運営では一種のアメリカモデルかもしれません。しかし、田舎へ行けば全然アメリカモデルではないわけです。

そういう中で、相対的に日本への支持や存在感は、20年前に比べれば落ちている。そもそも日本全体のプレゼンスが落ちているし、さっき言ったように中国の選択肢は増えてきましたから。

今、中国は世界中から情報を取り入れている。世界各国に華僑、華人が散らばって

いて、日本のような総合商社はなくても、情報はそういうネットワークでとれるわけですよ。アフリカなどになると、日本よりもはるかに情報を持っているという話になる。だから、まず日本人はそういうことに慣れて、あの栄光よもう1度という考えは……（笑）。

周 いや、なかなか慣れないでしょうね。例えば、私は日本のあるODA（政府開発援助）のシンクタンクに8年ぐらい在籍したのですが、初めての出張はカンボジアや、ラオス、タイに行かされた。一研究員にもかかわらず、大臣などの高官が出てきて説明する。そのプレゼンスはやはり大きい。そこから目覚めるのは大変なんですよ。

落ちたのは日本の国家イメージ 実質的な日中交流は拡大基調に

巖 80年代のジャパン・アズ・ナンバーワンの発想はやめて、一方では、アジアでの位置づけと言うけれども、では、日本人が思っているほど、本当にジャパンパッシングになっているかという、そうは全然思わない。

工藤 日本は無視されていないと。

巖 実際、私の田舎は蘇州、江蘇省だけれども、日本人を連れていくと、大歓迎する。昔と違い、政治的な大歓迎ではないですよ。その人が投資してくれる、工場をつくってくれる。それは常に歓迎するし、まだまだ日本人には実力がある。ほとんどの人はそう思っていると思いますよ。

周 ここで整理しなければいけないのは、

何が落ちたかという、国家イメージが落ちたんです。国家の発展モデルというイメージが落ちたわけです。ただし、資本の交流、個人の交流、情報の交流のレベルでは、これは拡大しているんです。

巖 技術を含めてですね。

周 信頼感も増している。だから、国家的な議論はやめたほうがいい。むしろ交流を促進する、健康的にやっていく。こういうことを邪魔するような動きを見せてほしくないんです。

歴史問題が日本の重荷に

劉 周さんがおっしゃったことは、すごく大事なことだと思います。つまり、日本は今、複眼的にアジアとの関係をもう1回見直すことです。アジアはもう変わったんです。外交関係から見ても、中国とロシアは戦略的なパートナーシップに進んできて、さきほど巖さんもおっしゃったように、中国と韓国は今すごくいい関係、パイプを持っている。

ここ十何年間、日本のイデオロギー、考え方は変わっていない。日本はまだ冷戦構造から脱却していません。正直に言えば、日本は意識的に脱却しようとしているが、脱却する方法も気力もないようです。現状は日本にとって不利です。

日本と周辺国との間で、歴史認識についての意見相違がときどき問題になる。歴史認識の問題については、中国にとっても、韓国にとっても、中日関係、韓日関係は一隣国の問題に過ぎないが、日本にとっては

それが2倍、3倍の大きな問題です。なぜかという、地縁政治学から見れば、日本周辺のロシア、韓国、北朝鮮と中国の中で、歴史認識については、日本とうまくいっている国は少ないからです。

現状を打開するためには、東アジア諸国は、近代の原点に戻ってわれわれ共有の共通のものを温める必要があると思います。

工藤 中国から見れば日本は隣国の1つにすぎないけれども、日中間に何かがあると日本は過大に、感情的に騒いでいるということですか。

周 第二次大戦が終わって半世紀以上も経ちましたが、日本はその終止符をまだ打っていないんですよ。中国では終わった途端に打ってしまった。戦争は終わった、正義が勝ったと。悪いやつは打倒された。悪いやつとは誰か、軍国主義だと。天皇だとは言っていないですよ。

しかし、日本に来てみたら、軍国主義を賛美する言論が目にあまります。民間の言論は「言論の自由」ということで理解できますが、政府代表者の首相までやっているという説明がつかないですね。ある意味では日本の戦後は終わっていないんです。アジアから見ると、これでは收拾がつかない混乱状況ですよ。また、この日本の混乱状況が中国、アジアに波及している。

アジアとの付き合いをどう深めるか

巖 繰り返しになりますが、日本は光り輝く存在ではなくなりつつある。しかし、それは日本が努力しなかった、日本人がそ

の間怠けていたということだけが原因ではないと思います。周りの変化がそれをもたらしている部分が結構ある。日本人はすぐに欧米と言いますが、実際の生活面、ビジネス面では、どう考えてもアジアは欧州をはるかに超えている。そことどう付き合っていくかということになると思うんです。

これからも日本はある程度の力をキープしていけるだろうと思っているんですよ。キープしながら、アジアの中でどのようにやっていくかということを考えたときに、僕は大きく分けて2つの分野があると思う。

1つは具体的な分野、ビジネスライクな分野です。一例を挙げれば、日本と中国のビジネスマン同士の交流を阻害しているビザの問題があります。中国の民間企業家、3000億、4000億円の売り上げを持つ会社の社長が、商用で日本に来るたびに何ヶ月も審査されるとか、こういうミクロな問題があるんですね。

たまたま僕の友達で、経済産業省の経済産業研究所にいる人が、日中経済シンポジウムを開き、経済産業省の課長保証ということで外務省にかけ合って、来る人みんなに3年間のビザを出した。それは当然少数の人ですが、ビザを出したら、TCLという大きな会社の李東生など、その後みんなちよくちよく日本に来る。そうやって来て、今度は松下電器と提携を始めたわけです。

つまり日本のために考えた場合、アジアが重要であり、こういうミクロ的な政策のところで、発想を変えなければならない。もちろん不法入国の問題はあるのですが、日本と商売をする人は、場合によっては日

本に投資してきますよ。

周 これはすごく大事です。

アジアから資金、人材を呼び込め

蔽 日本人は、投資と言ったら日本がアジアに投資するのだと思い込んでいる。しかし、5年、10年後のことを考えた場合に、多くの中国企業なり、韓国ではサムソンなりが投資してくるでしょう。それを阻害する発想は、世界広しといえども、やはり特殊だと思う。

どこの都市建設でも外資をいっぱい導入していますよ。上海なんて、香港資本を入れれば外資が半分以上でしょう。われわれが見ていると、東京の丸の内、大手町に外資系のビルはない。八重洲口の香港資本だけで結構話題になってしまうぐらいです。これからアメリカ資本だけではない、アジアの資本とも付き合う時代が来るんです。

もうひとつは、われわれは留学生だから言うのですが、日本の留学生政策は援助のための政策なんです。あなた方は貧しい国の学生だから援助をしてあげますと。アメリカは援助ではない。優秀な人が来たら、アメリカにとどまってアメリカの人材として頑張ってくれという政策です。留学生は援助の発想だけだとだめなんです。ODAもそうですね。何で国民の税金を使って援助するのかと。

中国の留学生は日本をパッシングしてアメリカへ行くとか、そういう議論がマスコミに横行しているけれども、では、日本のプライドを守るために来てほしいと言って

いるんですか。そうではないはずです。そういう人材に来てほしい、日本の発展に寄与してほしいはずです。

日本で会社を上場すると、特殊だからといろいろな人が取材に来たりするけれども、私からすると、日本で創業して、日本で上場して、日本で活動するのはある意味で普通のことです。それがアジアとの距離感において、現実が変わりつつあるのに、その辺のメンタリティーがまだあまり変わっていない。それが、ビザの問題もそうですが、いろいろなミクロ政策に反映している。僕は変えなければいけないと思います。

今度は周さんと劉さんの話に関係してくるけれども、アジアとの精神的な距離感をどう縮めるかです。そのひとつに歴史問題は含まれます。そもそも今日のこういう課題でも、日本とアジアというふうに常に対峙しているんですよ。

例えば靖国神社について、日本には日本の考え方があり、中国には中国の考え方がある、それはいいと思う。しかし、そういうものをちゃんと解決していくことが日本のためなのだという基本認識が必要なんです。最近のマスコミがひどいと思うのは、あおるのが自分たちの責務だと思っている、彼らは本当に日本に対して責任をとろうとしているのかと。一種のうっぶん晴らしなんです。

劉 毎日、そういうニュースばかりで、なぜ一斉に同じような論調があふれるのか、われわれはどここの国にいるのか、言論の自由がある民主主義の国とは思えないほどです。

問われる日本人の閉鎖的な意識、論調

工藤 厳しい指摘ですね。確かに日本人の意識、議論の論調は閉鎖的ですよ。外資なんてとんでもないという議論まで出てきている。

厳 その外資をもうちょっと分析して、どうなのかということ言うのはいい。ただ、多くの場合に感じられるのは、ナショナリズムというよりは「とにかく許せない」というような気持ちで、うっぶん晴らし的な議論をするのは退化現象ではないかと。

工藤 知的退化ですね。

周 日本のための議論が必要です。アジアのためになどと考えずに、日本のためにどう付き合わなければいけないか、日本のための大義をどのように立てなければいけないか。この点はミクロではなくてマクロの話を議論しなければいけない。例えばビザ、留学生の話も実はひとつのマクロの話に尽きる。それはアジアの元気、活力をいかに日本の社会に取り込むかということですね。厳さんがもしアメリカとかシンガポールに移転してしまったら、毎年数百億円ぐらいがそこへ行ってしまうでしょう。

厳 日本で700人ぐらい雇用しているわけで、僕がではなくて、この会社がという話だけでも……。

周 しかも、ここまで成功した留学生は厳さんしかいないんですよ。これは本来数十人ぐらいいていいはずだし、いればもっと……。

厳 だから、外国から人が日本に来て、日本で勉強して、企業をつくる、そういう

普通感覚でいかないと。

中国を平均賃金でみるのは間違い

周 中国人留学生の調査では、日本で就職する人よりも帰国して就職する人の比率のほうが高くなったんです。

厳 今までは留学生が卒業したら、賃金格差がすごくあるものだから、いろいろ嫌な思いはしても日本で何年間か勤めるのが普通だった。その賃金格差は今でもすごいけれども、これもまたマスコミの論調が間違っているんです。中国を語るときに、すぐに平均賃金でやるでしょう。あれは全然間違いで、それが分からない社長などいて、すぐに給料が高いと言うわけ。その人の頭の中にあるのは、中国人は今でも平均月収は1000元だと。でも、そんな額では北京、上海でちょっとしたホワイトカラーは雇えないですよ。まだ情報があまり流れていないということもあるでしょうけれども。

周 一部の日本人は、外を見るときに自分の価値観で見ってしまう傾向がある。日本社会の平均の感覚は、中国社会のバラエティーに富んだ感覚とは全然違う。そこで認識の誤差が生じるわけです。

工藤 最後に、将来的に日本はどんな国になるべきかということでは、どのような期待を持っていますか。

周 これは2つのシナリオしかない。1つは活力のある国のシナリオです。前提としてはアジア、世界の活力のある人々がここで自己実現できる、世界の資本もここで自己実現できるような国がつかれるかどうか。

社会の多様性、寛容性、諸制度、産業集積がつかれるかどうか。

もう1つは、活力のないシナリオ、活力がなくてもよいというシナリオがある。今のままの社会では、活力のある日本人も企業も海外へ出ていってしまうでしょう。

工藤 それでは、日本は高齢者ばかりになっていきますね。

周 それでもよいという国民的コンセンサスがあればいいのですが……。

蔽 美しく老いていくということだ。

工藤 まだ引退国家になるのは早すぎると思います。

まだ大きい日本の優位性を生かすには

周 残っているのは温泉で、観光立国とかね。これもひとつの生き方ですが、これは極端な話で、日本には非常に大きなストックがあるから、そこまでは落ちない。イギリスが世界の大国から退場して久しいけれども、資本で稼いでいる。ただし、資本で稼ぐときと商品で稼ぐときは社会構造が違って来るんです。その恩恵を享受する人の範囲も違って来る。工業国家で稼いだときは、みんなが平等に潤った。頭脳と資本で稼ぐときは、富は一部の層に集中していくわけです。

その意味では日本は、社会構造の再編成をしなければいけない。そうすると、逆に言えば、ある意味ではデフレがひとつの好機と見たほうがいいですよ。デフレを利用する国家像を議論し、大義を立ててやっていくと。

蔽 日本がアジアでどんな国を目指すべきかと、多くの日本人がそういう話をし始めたのは、まさに中国の台頭と関連していると思うんですよ。日本人には、あと20年したら中国に飲み込まれるのではないかという不安があるでしょう。ただ、現状認識として、日本は中国よりはるかに整備された社会資本や技術などがある。日本人は時として過剰に悲観したり、ある種の中国人が過小評価したりすることはあっても、まだ持っている優位性をどのように生かしていくのか。

その生かしていく道は、さきほどの周さんの話と同じで、メンタリティーと制度をオープンにしておかないと駄目だと思う。例えば労働者も、ドアの外に締め出しておいたのでは駄目だと。例えば中国では、なぜ田舎から上海に出稼ぎに行くのか。上海が中国をすべてコントロールできるかという、できない。しかし、カネのあるところ、経済が発展しているところへは行く。アジアをひとつの国として考えた場合に、日本は、もしかしたら中国における上海であるという可能性があるわけですね。いろいろな国の人が来ると。

もっとも、そのためには、日本国内の構造改革、いろいろなことを変えていくことは必要だと思うんです。中国がこのまま混乱を起こさずに発展していくと、アジアの中で日本が政治的なリーダーシップをとることは難しいと思う。ただし、日本はこれからも、中国とは違った種類のプレゼンスを持っているはずだし、それは中国にとってもあったほうがいい。今のアメリカのよ

うに一国主義というのは、国も企業と同じで、ライバルのいない業界の企業は暴走しちゃうんですよ。

周 アジアにおける適切な緊張感と活力……。

巖 活力をもたらす競争が、常に日本の役割のひとつとしてある。

劉 これからの日本は、多元化社会、文化的に豊かな社会をつくるべきではないでしょうか。例えばフランスは、ヨーロッパの中で目立つ覇権などはないけれども、世界のいろいろな国の芸術家を受け入れ、よい場所を提供して有名にさせる。そこで自分の夢が実現できる。中国の小説家はそこへ行ってノーベル賞をもらった。日本は現在その基礎、インフラを持っています。だから、制度にもっと柔軟性を持たせて、世界のいろいろな人、すぐれた人に国を開けば、必ずいろいろな国でまかれた種が日本で開花すると思います。

周 一番典型的な例はハリー・ポッターです。ハリー・ポッターの小説をつくったのはイギリス人ですが、その経済効果、実利を一番とったのはアメリカなんです。これがなぜかということを少し研究したほうがいいですよ。いろいろな意味があるんです。制度の問題もあるし、産業集積の問題もあるし、知的社会の問題もある。こういうケーススタディーをきちんとしたほうがいいんです。

巖 中国が発展したとはいえ、今の段階ではまだ日本のほうがおカネがはるかにあり、まさにそういう基礎はある。しかし、それを阻害しているものは何かというと、

簡単な例で、外国人はおふろに入れさせないとか、留学生が六畳一間の部屋を借りるときに、すごく嫌な思いをさせられるとか。そういうことをすれば、日本人にとってマイナスだと。今の世論などを聞いていると、一種の新しい孤立主義のようなところがあるんですよ。

工藤 自ら孤立を招いていますよね。私たちがそういう議論をきちんとする中で、日本の改革を考えようと思っています。今日はどうもありがとうございました。